

## 優秀賞

# 体験から学んだこと

八尾市立成法中学校 三年 中村 美和子  
なかむら みわこ

友達と遊びに行こうと家を出た瞬間、その人が視界に入った。サングラスをして、白杖を持った六十歳ぐらいの女性だった。私は、その女性を通学途中や近所のスーパーで何度も見かけたことがあった。スーパーでは、いつも店員さんに付き添ってもらい、いろいろと質問をしながら買物をしていた。その光景を見て、目が不自由なのに、自分で料理をしていることに驚き、包丁で手を切ったり、やけどをしたりしないのか心配になった。

女性は、私の気配を感じたのか、「すみません。天満宮はどこですか。」と尋ねてきた。私は戸惑ったが、体が勝手に女性の方へと動いていた。私は目が不自由な人と接したことがなかったので、どうやって天満宮までの行き方を説明したらよいかわかわからず、ただ立っているだけだった。すると、その女性

は、「私があなたの肩を持つので、私を天満宮まで誘導してください。」と言った。女性が私の肩を持ったとき、初めての体験にドキドキした。どれくらいスピードで歩いたらよいかわかわからなかったの、できるだけゆっくりと歩いた。「どれくらいスピードで歩けばよいですか。」と聞けばよかったと後で少し後悔した。天満宮までは、一分もかからない距離なのに、とても長く感じた。

「天満宮に着きました。」と言うと、「本当にありがとうございました。助かりました。」と女性が言った。私は、それがとても嬉しかった。「ありがとう。」と言われて、なぜか私の方が優しくされた気持ちになった。

その後、女性がどうするのが気になってしばらく見ていると、天満宮の中まで入っていた。参道は、でこぼこしていて危ないので、中まで案内すればよかったと、また後悔した。しかし、女性はスタスタと奥まで歩いて行ったので安心した。

安心したので、友達との待ち合わせ場所に急いで向かった。初めての出来事に戸惑い、待ち合わせの時間には間に合わなかったけれど、女性を助けるこ

とができてよかったと思う。

家に帰って、目の不自由な人の生活はどんな感じなのだろうと思ひ、実際に目を閉じたり、目を閉じながら歩いてみたりした。思っている以上に暗く、怖く、不安な気持ちでいっぱいになった。さらに、目を閉じてご飯を食べてみると、味はわかるけど、色やどのように盛り付けられているかがまったくわからず、目で食事を楽しむことができなかつたので、おいしさが減ると思つた。

これらは、あくまでも擬似体験で、目の不自由な人も、個人個人で見え方は異なり、私が思っているものとも違ふかもしれないが、こんな状態で日常生活を送り、家事などをするには、私達にはわからない恐怖や不安、そして、多くの努力が必要だと思つた。

最近、街で点字ブロックの上に自転車を置くなど、体の不自由な人に対する、思いやりに欠けた行為を見て、悲しくなることがある。みんな同じ人間なのに、なぜ冷たい目で見たり、心ない行動をしたりする人がいるのかとも思う。

このことを母に話すと、「昔に比べたら、障がい

のある人に対して、すごく理解が深まつたと思うよ。車いすの人が、おしゃれをして出かけている姿を見ると、いいことだなと思う。日本も外国のようにもつとバリアフリーが進めばいいと思う。」と言つていた。母の言葉を聞いて、私は、外国よりも日本の方がバリアフリーが進んでいると思つていたので驚いた。

今回、私が経験したのは、目の不自由な人を手助けすることだつたけど、この経験で学んだことを生かして、耳が聞こえない人や車いすの人など、体の不自由な人や困っている人を見かけたら、それぞれの人の気持ちになり、勇気を出して、自分から手を差しのべていきたいと思う。